

（町の祭礼と華やかな芸能）

町の祭り・芸能

概要

江戸時代（1603 年～1867 年）、小浜は港と城下町として栄えました。この間、宗教的影響と全体的な富の上昇により、農村部で見られるより簡素な伝統とは対照的に、優雅で活気のある祝祭が発展しました。大きな山車、複雑な踊り、豪華な衣装は、小浜の町の祭りの特徴となりました。その一部は何世紀にもわたって行われ、今でも毎年続いています。

もっと詳しく知る

小浜の町の祭り

小浜のような町でのお祝いは、主に農村や漁村で開催されたお祭りよりも大きく、より贅沢でした。正月や節分（春が始まる前の日）、夏に祖先の霊をたたえるお盆などの主要な祝祭日は特に人気がありました。神々への信仰と娯楽の両方のために、活気に満ちた舞や魅惑的なパフォーマンスが行われました。裕福な商人は祭りのために気前よく寄付を行い、多数の人々が祭りに参加しました。こうして、小浜の祭りは、宗教的な奉仕や芸術的なパフォーマンス、全体的に賑やかな雰囲気を楽しむことなどがある、壮大で手の込んだ行事になっていた可能性があります。

他地域からの影響

小浜は海上交易と当時の首都への物資の輸送に特化した港町だったので、その祭りはしばしば京都の文化と伝統の影響を受けました。また、17 世紀初頭に川越（現在の埼玉県）の酒井家が小浜藩主となった際、彼らは東日本で流行していた芸能の形式を持ち込みました。その一つである雲浜獅子うんぴんじしという獅子の舞は、今でも小浜市のある地区で演じられています。

小浜の祇園祭と放生祭

昔の小浜の都会的なお祭りの代表的な例は、廣嶺神社ひろみねの祇園祭でした。廣嶺神社所蔵の江戸時代の小浜祇園祭の絵巻には、山車や囃子、踊り子、衣装を着た参加者、見物人などによる賑やかな行列が描かれており、当時の祭りの大きな規模を物語っています。有名な京都の祇園祭の影響は、大きな山車、祭りの音楽、棒振りぼうぶりという棒を振る舞の踊り手などに見ることができます。小浜の祇園祭の演目の一部は、9 月中旬に八幡神社はちまんで行われる放生祭ほうぜの一環となりました。近隣の一団や飾り付けられた山車が街の通りを行き来し、数百年にわたって受け継がれてきた地元の伝統を称える民俗芸能を披露します。

展示品

このセクションでは主に、若狭地方の都市部の祭りで使われる衣装を着たマネキンを展示しています。それらのほとんどは、放生祭りに参加する演者を代表しています。棒振りという棒を振る人は、異国風の衣装を着て、長い薄い色の毛でできた頭飾りを着けており、大太鼓^{おおだいこ}という太鼓手は黒い模様のある特徴的な黄色の着物を着ています。神楽楽団の横笛奏者は、黄色い着物に、端に飾りがぶら下がった菅笠を合わせ、赤いベールで顔を隠しています。雲浜獅子の踊り手は、頂上に黒い羽がある獅子の頭飾りを身に着けています。他の衣装には、持っている儀式的な武器で人々を追い立てることで不幸を追放すると言われている赤い夜叉^{やせ}と、魚籠で作られた大きな頭を持つコミカルな人物であるおこべがあり、これらはいくつかの棒振りの集団と一緒に客を楽しませるものとして登場します。マネキンの後ろの壁には、約 150 年前に小浜で祝われた祇園祭を描いた絵巻物の拡大された絵が描かれています。